

---

# ハンカク

トマト男爵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハンカク

### 【Nコード】

N2367C

### 【作者名】

トマト男爵

### 【あらすじ】

『半角文字』で送られてくるメールが招く怪死。猶予は三日間…

あと…

ケンには、いわゆるフリーターと呼ばれる人種だ。

特に資格や特技も無く、他人に好かれも嫌われもしない、普通の若者という奴に入っている。

その彼が、酷く怯えた顔で私の店に入ってきた。

「…おやつさん」

彼は、私を『おやつさん』と呼ぶ。

…『私』は、居酒屋を営んでいる。彼は顔なじみで、よく仕事帰りに寄ってくれる。

「…どうした？ポカでもしてバイト先クビにでもなったのかあ？」私の軽口に答えず、ケンは携帯電話を私に見せた。

「……………これ」

それは、受信メールのようだった。

『アト、ミツカ』

メールは、半角文字でこれだけ書かれていた。

「…イタズラか？これがどうかしたのか？」

ケンは、怯えきった顔で呟くように言った。

「これと同じメールが届いたバイト仲間が、死んだ」？死んだ…？メールで？

「偶然じゃないのか？」

私の一言は、さらにケンの恐怖をよんでしまったらしかった。

「三日後に、あいつは誰も居ない道端で焼死した…原因不明だった……………」

ケンの話によると、そいつは黒焦げで、周りには火の気もなかったらしい。

「これを見て死んだ奴はもう三人いるんだ。俺も、あと三日の命なんだ……………」

「…どういう事なんだ？」

ケンは暫く黙って震えていたが、私を真つ直ぐに見つめて言った。  
「おやっさん、助けてくれるか…？一緒に、助かる方法考えてくれるか？」…こいつは本気だ。私は頷きながら答えた。  
「…先ずは、死んだ奴らについて聞かせてくれないか…その、”最期の三日”の出来事を」  
ケンは頷いて、ぼつりぼつりと話し出した…

## 一人目・ゴトウ

ピロロロ…

「ん？誰だ？」

ゴトウは携帯を開いた。画面に”メール1件”の表示が出ている。

『アト、ミツカ』

半角文字でこれだけ。何の事やら…

「誰だよ、これ…？」

送信先のアドレスを見る…

「!?!」

『33333333333333』

おかしい。こんなドメインも無いアドレスから送るなんて不可能だろ…

「イタズラにしちゃあよくよく手が込んでるな…」

取り敢えず、何が『あと三日』なのかも分からないし大方オタツキの無差別なイタズラだろう。そう思って、ゴトウは気にも留めなかった。

翌日

ピロロロ…

「ん？またか…？」

開いた画面には、

『アト、フツカ』

…流石に薄気味悪くなってきた…

「ケンなら何か分かるかもな…」

バイト先の後輩で携帯好きのケンなら、このメールを知ってるかもしれない。

明日、ケンにこいつを見せてみよう。案外、ヤツのイタズラかもしれないな。

この夜が、ゴトウの最期の安息となった…

朝、目覚めると同時にゴトウは携帯を開いた。  
特に何も無い。

「ったく、気にし過ぎだってな…」  
自嘲気味に呟いた刹那。

ピロロロ…

「ん？またかよ…？」

何気なくメールを表示させると…

ゴトウの全身は総毛立ち、携帯を落とした。  
身体は動かさず、視線だけが床を這う。

『キヨウガ、メイニチ』

今日、俺は…死ぬ、いや、殺される　！？ゴトウは携帯を手に取り、ケンに電話をかけた。

やや寝ぼけ声で電話に出たケンにゴトウは叫んだ。

「ケン、俺…メールに殺される…！」

未だ寝ぼけていたケンにも分かる程、その声は切迫していた。

「ゴトウ先輩…？どうしたんすか！？…取り敢えず落ち着いて下さいっすよ。」

ケンの声にし少し落ち着きを取り戻したゴトウは、ケンを近くのファミレスに呼び出した。

「これっすか…」

ケンも初めて見るメール…だが、半角文字の無機質さが妙に気になった。

「俺はどうなるんだろう…死ぬのか…？」

ゴトウの呟きに応えて…

ピロロロ…

「…！？」

「…きた…」

恐る恐るメールを開く。

『アト、ニジユップン』

無機質な半角文字が画面に列んでいた。

ゴトウの中の『何か』が弾けた。ゴトウは立ち上がるやいなや、店を飛び出して走り出す。

「あ…せ、先輩!？」

会計を済ませてケンも慌てて後を追う。

市街地を少し離れた橋の上でゴトウは肩で大きく息をしながら立っていた。

「先輩、落ち着いて下さいよ…こんなただのイタズラですよ!」

ゴトウには、ケンの声も届いていないようだった。

「死ぬ…俺は死ぬ…」

ただそれだけを繰り返す姿に、ケンの恐怖も膨らんできてしまった。ピロロロ…ピロロロ…

「…!!」

心は『止める』と警鐘を鳴らしている。だが、手は動き、メール画面を映す。

『オワリハ、クビククリ』

ケンは無言で携帯を投げ捨て、ゴトウを見た。

「何だ、お前ら…来るな…来るなああっ!!」

突然、ゴトウが周りを見渡しながら叫んだ。だが、周りにはケンしか居ない。

尚も虚空に向かって叫びながら、ゴトウは橋げたの方へ後退っていく。

「来るな…頼むから…来ないで下さい……」

泣き叫びながら、ゴトウは身体をのけ反らせた。

「あ、先輩、危な…!!」

ケンが声をかけた瞬間。

ゴトウの身体が揺れ、橋げたから落ちた。

「先輩っ!？」

ケンは駆け寄り、川を見下ろした。だが、ゴトウの姿は見えない。

沈む程の深さなんて、この川にはない…そう思った瞬間、ケンは思いました。

「『オワリハ』……………」

ケン は、真下を見た。

「先輩っ!?!」

ゴトウは、橋げたのボルトにパーカーのフードでぶら下がっていた。足を伝う尿が、既にゴトウが事切れている事をケンに伝えていた…

## 二人目・ウダガワ

ゴトウの葬儀はしめやかに行われた。

「ゴトウ…お前、どうしちまっただよ…」

ゴトウの棺の前で、力無くウダガワは呟いた。

同じバイト仲間、小学校からの親友…一緒に悪さもしたし、助け合う事もあった。それが突然いなくなる…

「ゴトウ…」

ウダガワの目には涙が溢れ出していた。それにしても死に方がありえない。

「ウダガワ先輩…」

ケンに肩を支えられながら立ち上がり、斎場の外に出た。

「ケン、本当にゴトウの奴はメールに殺されたっていうのか…?」

まだ信じられない。そんな話を信じるといふ方が無理というモノだろう。

その時。

ピロロロ…ピロロロ…

「…!!まさか…!?!」

ケンの顔つきが変わった。明らかに怯えている。

ウダガワは自分の携帯を取り出した。

「マナーにしてた筈だけどな…」

画面には『メール1件』の表示…

何気なくメール画面を開いてみる。

『アト、ミツカ』

半角文字でそれだけ書かれていた。

「何だ、こりゃ?」

首を傾げるウダガワ、青ざめるケン。

「ゴトウさんの始まりのメールがそれっす…」

「…!?!?」

ウダガワは、無造作にメールを消去した。

「馬鹿馬鹿しい。こんなモノでゴトウが死んだっていつのか？」

…だが。

ピロロロ…ピロロロ…

「何だ？」

又してもメール。その内容はというと…

『アト、ミツカ』

ウダガワの顔も蒼くなっていく。

「次はオレという訳か？…上等だ、ゴトウの仇はオレがとる…」

そう言いつつも、ウダガワの肩は震えていた…

口ではそう言ったものの、ウダガワは背中に氷を入れられたような感覚に陥っていた…

ゴトウの次はオレ…？一体何のつもりだ？オレも…死ぬというのか…？

葬儀を終え、自宅に戻るとウダガワは携帯を取り出した。メールアドレスを変えて、さらにメール受信を全て拒否する。

「これでよし、と…」  
だが。

ピロロロ…ピロロロ…

「嘘だろ…？」

ウダガワは携帯を手にして画面を見た。

『メール受信一件』

ありえない、ありえない、ありえない…

そして、メールを開くと、そこには…

『ムダダ、ニゲミチハナイ。』

「うわあああああつ！？」

恐怖のあまり絶叫し、続けて硬直するウダガワ。

やがて茫然自失のまま、ふらふらと外に出た。

気分転換しようと思ったからだ。

取り敢えず、近くのコンビニに向かう。その道すがらに、人形が落

ちている。

その首が、無かった。いつもなら、そんな事は気にも留めないが、今日はやけにそれが気になった。

何故、あんなものが気になるんだらう…？

冷たい汗が背中に流れた。まさか、オレの最期は…？馬鹿馬鹿しい、ウダガワはそんな想いを振り払った。

「…飯でも食うか」

近くにあるラーメン屋に向かって歩き出した、その時に。

一匹の猫が道路に飛び出してきた。その刹那…

キキイーツ！ゴズツ！

走ってきたトラックに轢かれ、猫の首がウダガワの足元に飛んで来た。

「うわあああつ！」

ウダガワは腰が抜け、その場に座り込んでいた。

猫の眼が、じっとウダガワを見上げていた。夥しい血を流しながら…

ただ、部屋の隅にうずくまり、震えながらじっと携帯を見詰めていた。

昏過ぎ。

ピロロロ…ピロロロ…

「きた……」

画面には、

『アト、フツカ』

半角文字で綴られたメールが、ウダガワの目に、焼き付けられていた。

その日、ウダガワは震えながら天井に向かって何か呟き続けていた。迫り来る恐怖の前に、ウダガワの脳は自我の崩壊を選択した…

翌日、ウダガワは唐突に我に還った。携帯に目をやると、メール受信を示すランプが点いている。

「やっぱ、きてるか…」

恐らくは『アト、イチニチ』とかだろう…そんな予想は、見事に裏切られた。

『キヨウガ、メイニチ』

『オウリハ、キリオトシ』

二通に分けて送られてきた死刑宣告。だが、ウダガワはもう取り乱したりはしなかった。

「上等じゃねえか…いいなりになんかならねえからな…見てやがれ」  
ウダガワは家を出ると、見渡した中で一番高いマンションに向かった。

普通なら、こんなに高いマンションの屋上は施錠されている筈なのだが、屋上入口の扉は、すんなりと開いた。

「ふん、死神までオレの味方って事か…」

与えられるであろう死よりも、自ら選ぶ死。それがウダガワが決めた結末だったのだが…

「これでオレの勝ちだ…ザマアミロ…ククク…」

狂った熱に満たされた瞳をぎらつかせ、フェンスをよじ登る。

「…みんな、あばよ…」

ウダガワは無造作に飛びだした。そして…

ウダガワの意識が薄れかけた時、すぐ側に迫る電線が目に入った。

「まさか…」

ウダガワが己の『敗北』を悟ると、電線がウダガワの首と胴体を切り離すのはほぼ同時だっただろうか…

### 三人目・リヨウヘイ

ゴトウにウダガワ、知人というには親しすぎる仲間を失い、リヨウヘイはふさぎ込んでいた。

「何なんだ一体…二人ともメールに殺された？そんな馬鹿な話があるかよ…」

ケンから聞いた話。普通ならとても信じるなんて出来ない。だが、二人共にメール通りの死を迎えている…その事実が、リヨウヘイの頭を支配していた。

「とにかく、もし『半角文字のメール』がきたら、お互いにすぐ連絡しよう」

ケンはそう言っていたが、もしかしたら次は俺か…？リヨウヘイは恐怖の中、二人と自分の共通点を探していた。

「あつ…！？『アレ』が原因なのか…？いや、まさかそんな…」  
ピロロロ…ピロロロ…

リヨウヘイの思考は、携帯の音で中断された。

「…つたく、誰だよお」

画面には、

『受信メール1件』

リヨウヘイの顔が、蒼白になった。内容は、見なくても判る。見てはいけない、だけど、見なくてはならない。リヨウヘイはメールを表示させた。

『アト、ミツカ』

画面の真ん中にある、半角文字…

「きた…」

脊髄に氷を撃ち込まれたような感覚。口の中は渴ききって、呻きも出せない。

リヨウヘイは、茫然自失のまま、画面を見つめているばかりだった…  
我に帰ったリヨウヘイは、直ぐにケンに電話した。

「リヨウヘイ?...!!もしかして『きた』のか...!？」

ケンの声は震えていた。リヨウヘイも震えた声で返事を返す。

「ああ、『きた』...やっぱり『アト、ミツカ』だった...」

二人の間に重い沈黙が流れた。実質、二日しか猶予は無い...

「ケン、それでな...」

沈黙を振り切るように、気になっている事をリヨウヘイは切り出した。

「俺達には、一つだけはつきりした共通点がある」

何故か、リヨウヘイには、それこそが“重要”だという確信があった。

「俺達は、『あそこ』に行つて『アレ』を見た...」

ケンも、その言葉に、思い当たるものがあつた...

「ああ、『アレ』か...出来れば思いだしたくなかつたな、『アレ』は...」

互いに脳裏に浮かんだ『アレ』。それは、言葉にするのも悍ましい『幻影』、いや、『悪夢』...

「つまり、『アレ』が俺達の命を狙つてるんじゃないかと思うんだ...」

有り得ない、だが『アレ』ならば有り得るかもしれない...だとするならば。

「リヨウヘイ...それじゃこれは...」

リヨウヘイの答えはやはりケンの想像通りだった。

「ああ...。きつと間違いなく『アレ』の“呪い”だろうな...」

『アレ』。それについては数週間前に話が遡る。

いつもの週末。いつものメンバー。リーダー格のゴトウが切り出した。

「実はな...ダチに聞いたんだけどさ、わりと近くに、『惨殺事件』があつた家があつてな。そこが『出る』らしいんだよ。皆で行つてみようぜ?」

よくある“都市伝説”というやつなのだろう。そこへ“肝試し”に

行こうというのだ。

「いいね、たまには刺激的な事も必要だよな！」

ウダガワが話に食いついたが、リョウヘイとケンは素直に話にのれなかった。

「…なんか嫌な予感がするっすよ、先輩…」

リョウヘイが言うと、

「おいおい、いきなりビビリ全開かよ、リョウヘイは…結構有名らしくてさ、中には女の子だけで見に行ってる奴らもいるってさ」

ウダガワは半ば呆れ顔で

「ナンパ目的かあ？」

ゴトウは頷いて、

「怖い時って、女の子は側の男に頼るらしいぜ？それってチャンスじゃね？」

あくまで呑気なゴトウに、ケンも吹き出した。そして四人はその廃屋に向けて、車に乗り込んだ…

廃屋に着く頃には、日も暮れて、夜の帳がその建物を包んでいた。

外見はごく平凡な二階建てで、廃屋という割には綺麗な外観を保っていた。

「なんだ、今日は俺達が一番乗りみたいだな…」

辺りを見回してウダガワが呟いた。

「ま、せっかく来たんだしな…少しすれば『お仲間』が来るんじゃないか？」

ゴトウはそう言いながら、玄関に向かうと、扉のノブに手をかけた。

「ケン、ここはやべえ」

リョウヘイがケンに囁く。少しだがリョウヘイには靈感がある。そこにいる“モノ”の危険を、彼の靈感は告げていた。

「おい、何してんだよ！中に入るぞー」

ゴトウの声がした方を見ると、ゴトウに続いてウダガワが入っているところだった。

「仕方ねえ、行こうか」

ケンに促され、リヨウヘイも中に入った。  
すると、先に入った二人が立ち尽くしている。

「あ…あ…」  
声にならない叫びをあげ、二人は前を指差している。そこには、あ  
るはずの無い『モノ』があった。

髪の毛で梁に吊された女。全裸にされ、胸から下腹部まで切り裂か  
れ、傷口を開かれている。中は何も無い…中身は、足元に拡げられ  
ていた。胃、肝臓、脾臓、肺、そして心臓…

腸は全て引き出され、彼女の手足を縛りあげている。辺りに血が全  
く無い事が、臓器をより鮮明に見せることになったが、そこは血の  
匂いでみたされていた…

顔はうなだれていたが、やがてゆっくりと頭が上がっていった…そ  
の虚ろな目が四人を見た、いや、睨めつけた…四人の恐怖が臨界点  
に達した。四人は叫ぶ事も忘れ、入口に向かって走った…

廃屋で見た惨殺死体の幻。一連の不審死は『彼女』によるものなの  
か…ケンもリヨウヘイも、そう考えるのが自然に思えた。

「だけど…仮にそうだとしても、だ」

リヨウヘイはケンも今抱いている疑問を口にする。

「俺達は何処で、何をすれば助かるんだろう？」

二人は『何処』については見当がついていた。

「あの廃屋、か…でもリヨウヘイ、『何をする』かが一番の問題だ  
な…」

しかし、リヨウヘイは首を振って言った。

「お前、あの廃屋が何処にあるか覚えてるか？」

「あ…」

そう、あの廃屋の場所は、ゴトウしか知らなかったのだ…

「ケン、ネットで調べられる筈だよな？割と有名みたいだったしな  
？」

ケンは頷いて応えた。

「やってみよう、時間も無いから、急ぎまくるしかないな…！」

そして、一日、二日と時は過ぎていった…だが、どこにもあの廃屋の情報は無かった。ついにリヨウヘイは壊れ始めた…ケンも近寄れなくなり、周り全てに当たり散らした。だが、時は無情に過ぎていった…

最期の朝。やはりメールは送られてきた。

『キヨウガ、メイニチ』

「やっぱりきたか…」

なぜかリヨウヘイは落ち着き払っていた。観念した、というか、或いは心の片隅に助かる奇跡でも抱いていたのか

「俺の死に方はなんだろうな…？せめて、派手に逝きたいもんだな…」

そう思った時、着信音が鳴った。

「おう、ケンか。やっぱしメール来たぜ…『キヨウガ、メイニチ』だとさ」

ケンの溜息が電話の向こうで聞こえた。

「そうか…でも、まだ諦めるのは早いだろ？」

ケンの言葉も、今のリヨウヘイには虚しく聞こえた。せめて、こいつには…

「ケン、お前は何か生き残れ…俺達の仇をとってくれ…」

「リヨウヘイ…」

「じゃあな…」

リヨウヘイは最期の電話を切った。さて…

とりあえず、家の中には居たくなかった。リヨウヘイは散歩にでも行くような気楽さで家を出た。愛車のバイクに跨がり、死に場所を探しに…

リヨウヘイは、街を抜け、人気の少ない港に向かってバイクを走らせていた。やはり、自分の屍を人目に晒すのは嫌だった。

「もう、この辺でいいか…さあ、どうするんだ？」

リヨウヘイは『彼女』に向かって問い掛けていた。暫くの後、『その時』はやってきた。

ピロロロ…ピロロロ…

「きたか…」

そして、メールを見たリヨウヘイは首を傾げた。

『オワリハ、ヤキツクシ』

焼き尽くし？こんな所で？何しろ港なのだ。火の気は無い。

「そりゃ無理だろ…」

リヨウヘイは煙草に火を点けた。これが最期の煙草だと思いながら煙を眺めていた。

「さて、と…」

リヨウヘイは煙草を投げ捨てた。次の瞬間…

「うわあああつ!?!」

リヨウヘイの全身を炎が包んだ。バイクから漏れだしたガソリンが、リヨウヘイの足元に一直線に流れていた――

「宣告通り、だな…」

そう自嘲めいた最期の言葉も、烈しく燃え盛る炎に焼き尽くされていった…

## 最後のひとり

「成る程…」

私は頷いた。ケン是一通り話し終わると、溜息まじりに言った。

「おやつさん、あの廃屋いへと、そこで何があつたのかが判れば…」

そうだ。恐らくは、それがケンを救うカギになるだろう…

だが、手懸かりは無いに等しい。私は、原点に戻って考える事にした。

「ケン、もう一度メールを見せてくれないか？」

ケンは頷き、携帯の画面を「私」に向けた。

『アト、ミツカ』

画面の中央に列ぶ半角文字に、何か違和感をおぼえた……………“中央

”！？何故、本文が左上から始まってないのだろう？

「ケン、何故中央に文字があるんだろう？」

ケンは少し考えて、

「タグを使ったか、あるいは見えない文が前にあるとか…！？」

どうやらケンも気付いたようだ。

「こいつを“引用返信”してみるか…」

だが、このままでは、文字が有っても判らない。

「おやつさん、ノートPCある？」

唐突にケンが聞いてきた。私は愛用のノートパソコンを取り出した。

「今からそこに転送するから、メアド教えて。」

私は困惑しながらも、ケンに従った。やがて、ケンの携帯からメールが転送されてきた。

「おやつさん、画面の背景色を変えて。」

私は頷いて背景色を変えてみた。すると…

『ナゼオマエタチハキタノダ・・・ワタシヲミルナ！！！！ワタシヲミルナミルナミルナミルナ！ワタシヲミタモノハアト、ミツカノウチニコロシテヤルカナラズダ！ダカラワタシヲミタコトハワスレ』

口。シニタクナケレバワスレテシマエ!!」

声も出なかつた。最も原始的な感情、“恐怖”が二人を包んでいた。『彼女』…死して尚残る怨念。一体、『彼女』に何があつたのか? 「取り敢えず“猟奇事件”を扱つたサイトを探してみるか…」 私は、キーボードを叩き始めた。そして“それ”は割と早く見付かつた。“彼女”の名前は『梁子』(やなこ)、5年前に生きてまま解剖された看護婦。犯人は夫で医者慶介。動機は『医学界の発展の為』だそうだ。

生きてまま身体を切り裂かれた梁子は、笑っていたという。麻薬で身体感覚が麻痺していた上に、精神も破綻していたからである。慶介は天才的外科医で、予てより考案していた『無臓器摘出手術法』を完成させる為に、梁子の身体を使った。その時、一つだけ、二人の間に約束があつた。『誰にも見られない事』  
そして、約束は破られた…

事件の翌日、慶介は現場に立つて、梁子の全てを写真に収めていた。慶介は満足感に満ちていた。“これ”は芸術だ。人ならぬ神のつくり賜つた『ヒト』という存在。緻密に設計された『肉体』、様々な容姿、役割を持つ『内臓』…慶介は夢中でシャッターを切つた。梁子を写しながら、彼は失禁していた。涙が頬を伝つた。悲しみではない。感動の為だった。

「素晴らしい…素晴らしいよ、梁子…」

慶介はもはや外科医ではなくなつていた。『医学』という“麻薬”に侵された狂人と化していた…

それから数日の後、慶介のブログで、梁子の写真と慶介の恍惚感溢れる文が流れた。『誰にも見られない』約束は、破られた。結果、このブログから慶介の逮捕につながるのだが、慶介は、自供を終えた三日後に死んだ。自らの身体を切り裂き、己の内臓を全て抜きだしていた。使用したメスは、慶介の物だった。だが、一体誰がメスを慶介に渡したのか? 隠し持っていた筈は無い。警察の身体検査は生易しい物ではない。では、誰が…?

私は、梁子を知っている。彼女は私の姉の娘：また、あの『いゝ廃屋』  
に行く事になるうとは…幸か不幸か、私は棺に納められた梁子の顔  
しか見ていない。つまり、私は『見ていない』のだ。

「ケン、行くのでしょうか…全てを終わりにしよう」  
私の声にケンが頷いた。

はたして、あの子は私の話を聞いてくれるだろうか？だが、今はそ  
れに賭けるしかないのだ。私になついていたかわいい姪だった、あ  
の梁子に逢えるだろうか…そんな想いを胸に、車を走らせた。

「着いたぞ…」

ケンは血の気の失せた顔で頷くと、車を降りた。目の前に佇む廃屋、  
全ての始まりの場所へ、私とケンは入っていった…

玄関で、不意にケンが私に携帯を渡した。

「もしメールがきたら、おやつさんが見てよ…」

「どうやら、自分の死に方は知りたくないらしい。」

「そのメールを止める為に来たんだ。行くぞ…」

「私は、ケンが梁子を『見てしまった』部屋に歩いていった。」

「ここだよ…」

酷く怯えた声でケンが呟いた。私は大きな声で『彼女』を呼んだ。

「梁子、オレだ。居るんだろう？話があるんだ、顔を見せてくれ！」

梁子の姿は現れず、声だけが聞こえた。

「おじさん…？」

ああ、梁子の声だ…

「梁子、久しぶりだな。本当は此処には来たくなかったんだ、お前  
のいない淋しさと悲しさを思い出すから…」

「ごめんね…でも、どうしたの？私の事、誰に聞いたの…？」

私は、全てを話した。

「…という訳だ。今日はこいつの命乞いに来たってわけだ。何とか  
ならないものかな…？」

梁子は冷え切った声で答えた。

「この部屋を出る迄に私の姿を忘れたら助けてあげる事にするわ…」

「分かった。有難う、梁子：またいつか来てもいいかな？」

「ええ、おじさんだけは特別に許してあげる。」

私は、ケンの肩を叩いて言った。

「忘れる、そうすれば助かる」

ケンは震えながら小さく頷いた。

「じゃあな、梁子」

「うん、またね…」

私とケンは外に向かって歩き出した。

「あっ…」

玄関まで来た時、ケンの靴紐がほどけた。

「おやつさん、先に行ってていいよ。」

「分かった」

私が外に出た瞬間、ケンから預かった携帯が鳴った。まさか

『オワリハ、オシツブシ』

メールを読み終えた途端、廃屋が大きな音をたてて崩れた。

「彼、忘れなかったみたい…約束だから、ね…」

梁子の声が瓦礫の中から聞こえたような気がした…

私にも予想はついていて。多分、こうなる事が…

「ケン…」

そして、私の携帯が聞いた事の無い着信音で鳴った

『パソコンデ、ワタシヲミタノネ…』

メールを見た私に梁子が、耳元で囁いた

「アト、ミツカ」

『ハンカク』完

## 最後のひとり（後書き）

お付き合いいただきありがとうございます。身近な『携帯メール』からの恐怖を書きたくて…これは全三部作の始めです。この後も順次公開致しますので、興味をもたれた方は宜しくお願いいたします。トマト男爵でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2367c/>

---

ハンカク

2011年1月4日00時40分発行